

そばのタデノクチブトサルゾウムシ（新寄主）

令和4年7月下旬に、空知地方のそばで、上位葉の萎れや、下位葉が黄化・脱落する症状が認められた。症状が甚だしい場合は、頂部の茎及び葉の枯死が認められ、主茎の地表付近から中位節にかけて約1mmの円形の穴がしばしば見られた。茎の内部には昆虫の糞と考えられる褐色～灰褐色の粉状のものが認められ、体長約3～4mm・頭部が赤褐色で体は白～黄白色の無脚のゾウムシ型幼虫が見られる場合があった。主茎内部に幼虫が見られた頻度は、高いほ場で概ね5～6株に1株程度。低いほ場では10～15株に1株程度とほ場・場所によって異なった。

そばの植物体からは体長2mm程の小型で体色は赤褐色、全体に灰～灰黄色の毛を装い小循環板後方に白紋がある口吻の短いゾウムシ成虫が多数認められた。これらはタデノクチブトサルゾウムシ (*Rhinoncus sibiricus* Faust) と同定された。

本種は、極東ロシア及び中国からそばに対する加害報告がある。これらによると年1回の発生で成虫越冬する。そばが出芽すると茎葉を成虫が食害するため生育不良となり、そして幼虫が茎内を食害することにより茎が折れまた枯死する場合がある。さらに、この食害により花蜜の量が減るため昆虫類の訪花数が少なくなり結実数が減少することも加わり、収量が半減する場合もある。

本種は日本に広く分布し、タデ類に多いとされるが、そばにおいて確認されたのは国内初である。

(上川農試・空知農業改良普及センター)



そばのタデノクチブトサルゾウムシ（左：幼虫による食害、右：成虫）

（左：上川農試 古川 原図、右：上川農試 佐々木大介 原図）